

----- 質問コーナー -----

今回は日本雑草学会に寄せられた質問に対し、日本雑草学会広報委員長の森田弘彦氏が回答された内容を転載させていただいた。

（問）池波正太郎の小説「スパイ武士道」の中で、隠者が「水輪草を濃く煎じた汁をつけると密書の封が痕跡を残さずはがれるのである」とありますが、「水輪草」とはどんな草か植物図鑑で調べましたがありませんでした。「水輪草」とはどんな草か教えて下さい。（横浜市〇様より）

（答）池波正太郎氏の小説「スパイ武士道」中での「水輪草」が何であるかについてのお問い合わせを日本雑草学会事務局あてに頂きました。

お葉書にありますように、現在の日本の植物図鑑にはこの名前の植物はありません。地方の独自の呼び方（方言名）にも見あたりません（日本植物方言集：八坂書房）。中華人民共和国での現在の植物名（中国高等植物図鑑1-5：科学出版社）や台湾での植物名（台湾植物図鑑上下：国立訳編館）の索引にも「水輪草」という項目は出てきません。

江戸時代より以前の事については、日本の古典書籍に掲載されている事物の百科事典であります「古事類苑（吉川弘文館）」の「植物部」にはありません。植物の古記録を収録した「草木辞苑（木村陽二郎）」にもありません。江戸期に中国からもたらされた漢方の集成である「本草綱目（李時珍）」にも「水輪草」はありませんで、これの和訳本「国訳本草綱目（春陽堂）」にもありません。「本草綱目」にならって作られた「大和本草（貝原益軒）」にもありません。江戸後期の植物図鑑「草木図説（飯沼慾斎）」の草部にもありません。従って、江戸時代にも「水輪草（すいりんそう）」を正名とする植物はなかったことになると考えます。

江戸時代の植物の地方名については、江戸時代後期の本草学者小野蘭山氏が「本草綱目」を講義した記録であります「本草綱目啓蒙」にたくさん収録されていますが、この中に「すいりんそう」はありません。当時の方言名がすべて記録された訳ではありませんし、「個人的な好みで本人しかわからない名前と呼ぶ」こともままあることですので、江戸時代に「すいりんそう」と呼ばれていた植物がなかった、と言い切

ることは難しいと思います。しかし、「見あたらない」ものです。

辞書によりますと、「水輪：四輪、五輪の一」とあります。宮本武蔵の「五輪書」にありますように、仏法での「地輪、水輪、火輪、風輪、空輪」のことと言われます。「水輪」はもちろん「地・火・風・空輪」とも植物名としては使われておりません。これは、いずれも哲学的な概念で形がないため、「〇輪に似ているから」ということで植物の名前に使われることがなかったのだと思います。

次に、小説での「水輪草」の用途ですが、お葉書では「此の草を濃く煎じた汁をつけると密書の封が痕跡を残さずはがれるのである。」とのこと。密書」というものを見たことがないのではっきりしませんが、紙に書かれたもので、封は糊、膠またはロウでされたものではないかと思ひます。膠やロウを植物の煮汁で溶かすことはまず無理だろうと思ひます。「糊」であれば、わざわざ植物を「濃く煎じて」使うよりは、鉄瓶の湯気に当てる方がきれいに剥けると思ひます。どんな植物でも「濃く煎じて」しまうと、汁は緑色から褐色になるはず。これを和紙につければたちどころに色が付いてしまいます。従って、「痕跡を残さず」というのもまことに不思議な話であります。江戸時代の市井でのこぼれ話を集めた「耳囊（耳ぶくろ）」という本がありますが、「封をとく法」というような綱目はありませんでした。

以上のことから、「水輪草」は池波正太郎氏の文学的創作であろうと思ひます。氏は時代考証を十分にされた方とは思ひますが、これは事実とは思われません。小説家が植物を用いる場合には時には失敗があります。中里介山氏の名作「大菩薩峠」に、ツガザクラの下で武士が斬り合いをした、というのがあって、良く知られた例です。ご案内のように、ツツジ科のツガザクラは高山植物でせいぜい高さ20cmほどの植物ですから、これはまあ、大変な話です。

なお蛇足ですが、お葉書を頂いて「スパイ武士道」を開いてみました。「水輪草」以外には山葡萄、桜、（木無（ブナ）」という植物名がありました。小説の中味から見て、日本海に近い

北陸のどこかだと考えますが、この辺りで武士が飛び回る範囲の標高の低い所に「ブナの密林」があったという話には、いかに「山国」という設定であっても無理があると思います。この小説は全編にわたってフィクションであると思います。

〔問〕水輪草については、大変お世話になりました。親切丁寧なご返事に恐縮しております。お言葉に甘えてまた次のことを教えて下さいませようをお願いいたします。

柳田国男「遠野物語」(五〇番)の「カッコ花」のことです。どのような草かお判りになりませんか。(五〇)死助の山に「カッコ花」あり。遠野郷にても珍しい花というなり。五月閑古鳥の啼く頃、女や子供これを採りに山へゆく。酢の中に漬けておけば紫色になる。酸漿の実のように吹きてあそぶなり。此の花を採ることは若き者の最も大なる遊樂なり。

〔答〕さて、今般は「遠野物語」の「カッコ花」についてお問い合わせを頂きました。青森県から岩手県にかけてカッコ、カッコバナ、カッコノノコ、カッコノミズクサなどの名前では呼ばれる植物はラン科のアツモリソウです(日本植物方言集 草本類篇 八坂書房)。現地での模様はこまかく存じませんが、インターネットのホームページを探しますと、岩手県の住田町で町の花になっておりまして、東北電力では「開発と濫獲で激減した『カッコバナ』(アツモリソウの地方名。カッコの啼く頃花を付けることによる。)を遠野の山野に甦らせたい」との事業をやっているそうです。遠野物語の中の「カッコ花」とアツモリソウの関係を現地では自然に理解しているものと思います。

ご案内かと存じますが、袋状の唇弁は陰囊にたとえられることが多かったようですが、袋状ですのでホオツキのように遊ぶことが出来たことと思います。斎藤たま著「野にあそぶ(平凡社 S49)」には「パンバナの花」の項に「カッコ花(アツモリソウ)少し深い山の中の草原などに生えるものでアツモリソウというのがある。ラン科の植物で茎の先に四、五センチの丸い花をつけ、それには上方にやはり丸い口が開いていてちょうど巾着のような格好をしている。

子供たちはこれを梅酢につけて赤くきれいな色に染め、そして柔らかくなったものを口に入れて、ほおづきを鳴らすときのように、ふくらましてつぼめたりして遊ぶ。これはほおづきと違って鳴らすことはできないのであるが、ふくらまして風船にするのが楽しみなのである。カッコウ花の他にはカタゲア(カタクリ)の葉やアメフリバナ(蛍袋)、桐の花などでもやり、これらをふくらました時に花の付け根のでっぱりやガクがあつておかしいのではないかと思うと、始めに舌の上で器用に花を裏返しにして内側に入れてしまうのである。女の子には大変よく遊ばれたもののようで、カッコウ花など町の中で手に入らないところでは、五本、十本と束にして『かっこうばなよござんすか』『かっこうばな、かっこうばな』と売りに来たものだという(岩手県釜石市・岩手県平泉・岩手県高田市)。」とあります。

私事で恐縮ですが、高校生の頃に山梨県の山中で、アツモリソウの変種でありますホテイアツモリソウを見つけて大変に感激したことがあります。

なお、「カッコ」と呼ばれる植物には、アツモリソウの他に、アヤメ、イタドリ、ウツボグサ、カキツバタ、カナクギノキ、サワフタギ、ショウブ、ノカンゾウ、ハナショウブ、ホタルブクロがありますし、「カッコーバナ」ではこれらに加えてオニユリ、ヤマユリがあります(日本植物方言集成 八坂書房)。

柳田国男先生には、「野草雑記」という名著があります。すでにご覧になっていることと存じますが、これを見ますと植物に造詣の深い方であったことがわかります。残念ながら「野草雑記」にはアツモリソウは採録されていませんでした。

〇様は大変な読書家と拝察いたします。文学に出てくる植物を植物学の立場から論じると言うことは昔から多くの方がやっておられます。万葉集から近松物までの古典については松田修氏の一連の著作がありますし、矢頭猷一氏の「文学植物記」、古山久氏の「漱石の植物」、塚谷裕一氏の「異界の花-ものがたり植物図鑑」など、たくさんあります。何かのおりにひもといて頂ければよろしいかと思います。